

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	
Title(English)	Appropriation of Tokyo through the Spatial Practices of Migrant Commonalities
著者(和文)	RAHMANAmena
Author(English)	Amena Rahman
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第11850号, 授与年月日:2022年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:塚本 由晴,安田 幸一,奥山 信一,山崎 鯛介,塩崎 太伸
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第11850号, Conferred date:2022/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名		Amena Rahman		
			氏名	職名			
論文審査 審査員	主査		塚本 由晴	教授	山崎綱介	教授	
	審査員		安田 幸一	教授			
				奥山 信一	教授		
				塩崎太伸	准教授		

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は『Appropriation of Tokyo through the Spatial Practices of Migrant Commonalities』(海外からの移住者の共有性の空間的実践を通じた東京の領有)と題し、以下の6章から構成されている。

第1章「序」では、地理学的に異なる場所から移住する人々が新しい地域性に直面した際の、都市の社会空間的環境におけるアイデンティティの変化と適応を、共有性(コモナリティ)の実践とふるまいを通して明らかにするという本論文の目的について述べている。また、既往文献における関連分野の知見や、近代以降の日本における移民コミュニティの概略史を踏まえて、近寄りがたさから親しみやすさまでの、アクセシビリティの差に準拠して、モスク、南アジアの食と祈りのための施設、韓国ポップカルチャー商店街を対象に、インタビュー、フィールドサーベイ、参与観察を組み合わせた分析を行うという本論文の研究手法と、概要について述べている。

第2章「Spatial Practices of Mosques in Tokyo」(東京におけるモスクの空間的実践)では、東京におけるモスクのフィールドサーベイ行い、伝統的なモスクの類型から導かれた「儀礼的規範」に紐づく複数の「建築的規範」要素の分節と配列を、入口から祈りまでのシークエンスおよび性別の仕切りから検討することを通して、既存建築物の制約を強く受ける祈りの場である Salat と水場である Wudu の適応の仕方から7つのパタンを導いた上で、これに運営者へのインタビューから得られたモスクの設立経緯や運営方法を重ねて、東京におけるイスラム・アイデンティティ確立のための空間的実践の特徴を明らかにしている。

第3章「Spatial Practices of South-Asian Commonalities formed through Food and Prayer within Tokyo」(東京における食と祈りを通じた南アジアの共有性の空間的実践)では、南アジアの食に関わる食料品店、レストランおよび宗教的な祈りの場のフィールドサーベイを通して、それらが駅周辺の雑居ビルなどに集中するクラスターとして西葛西、御徒町、池袋、新大久保、蒲田、十条を見出し、各クラスターにおける南アジアの共有性の空間的実践を検討した結果、食料品店は食材についての規範への応答、レストランは規範と地域住民の嗜好の調停として捉えられること、祈りの場にはファサードを変えて都市空間に働きかけるモスクと、本国製のしつらいや道具を内部に持ちつつも外観には現さないヒンドゥー、ジャイン、シク等の寺院の対比が見られること、さらにクラスターは、蒲田と新大久保では食と祈りの場の使われ方と出身地の関係、西葛西と十条で

は宗教か生活かというアイデンティティの背景と施設の関係、池袋と御徒町では食と祈りの場が引き合う関係により、特徴付けられていることを明らかにしている。

第4章「Content Spatial Practices Reinterpreting a Street into a Hanryu Shotengai」（通りを韓流商店街化するコンテンツ空間の実践）では、コリアンタウンとも呼ばれる新大久保の一街路のフィールドサーベイを行い、韓国ポップカルチャーの共有性の都市への現れを、韓国レストラン、スキンケア、衣服、雑貨店などのコンテンツ由来の、道の空間を領有する要素の分節と、道際、道と建物の間の罫、建物壁面という道からのセットバック内での配置から検討することを通して、「コンテンツ空間」の構えとして6パターンを見出し、領有要素の「道際への蟻集」、建物と道の間居場所を作る「罫の増幅」、道沿に切れ目なくコンテンツが連続する「水平凝集」を、韓国ポップカルチャーへの参加を促す空間的実践の特徴として明らかにしている。

第5章「Hybridized Spatialities」（混淆したスペーシャリティ）では、各章からの結論をもとに、東京の都市空間に現れた移民の共有性（コモナリティ）には、閉鎖、半開放、開放といった相対的なアクセス性の違いがあり、閉鎖において検討された「建築的規範と儀式的規範」、半開放において検討された「禁止と嗜好」、開放において検討された「期待と参加」を都市空間を領有する原理としてまとめるとともに、都市空間が比較的小さな建築物の単位によって構成されているという東京の共有性における移民の共有性を「多様性と同一性」「応答と混淆」「摩擦と和解」の対比現象として考察している。

第6章「結論」では、第2章から第5章までの各章で得られた結果をまとめ、将来の研究への展望について述べている。

以上を要するに、本論文は外国人としての当事者性を背景に、東京をフィールドにマイノリティの空間的実践に焦点を当てたカルチュラルスタディの建築・都市分野における先導的役割を担うものであり、その成果は、さらなる多様性の受容を求められている建築や都市の更新に有効であることを示すものである。従って本論文の成果は、環境・社会理工学上、建築学上貢献するところが大きく、博士（学術）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。